

幹部教育に専念して

神奈川県 広島 淳一

私は昭和十六（一九四一）年「第七条志願兵」として徴兵検査を受け、図らずも甲種合格となりました。若干十八歳の時でした。

昭和十七年四月一日、旭川の第七師団北部第三部隊へ入隊し、歩兵第二十七連隊第三大隊第十中隊に配属となりました。

ここで昭和十五年、昭和の軍制改革について申し上げますと、「作戦要務令」「歩兵操典」も改訂され、また広漠たるソ満国境における敵の縦深陣地に対する攻撃が訓練の中心となりました。また従来の兵科名が廃止されて陸軍に統一されました。主計や軍医の各部はそのままでしたが、歩兵は「北部」という通称号になり、自分が入隊した頃は軍服は縦襟と折襟、軍帽は正と略帽が有りました。

昭和十七年四月一日、入隊した当日は、旭川は

なりました。

大隊長には、自分が代表として「広島淳一外四十人は十七年十月十日付けをもって下士官候補者を命ぜられました。ここに謹んでご報告申し上げます」と予期せぬことではありましたが、何とかご報告致しました。後で教官より上出来であったとお褒めを頂き感無量と身の引き締まる思いでありました。

また中隊長にも外三人で、同様の申告を完了し、中隊長からも訓示を頂き、自分達候補者は集合教育のため旭川当麻にある幹部教育隊にて教育を受けることになりました。

教育隊では隊長が交替し、さらに教官も各隊より八人が来ました。ここでは候補者三百余人の外、衛兵や炊事班が有り、一区隊より四区隊まで、各区隊七十二人位で、外に重機関、速射、大隊砲、連隊砲、通信隊が有り、自分は第二区隊となりました。

昭和十八年四月一日、上等兵を命ぜられました。

雪で、積雪が一メートル余りもあり、しかも身体検査は野外の雪中運動場において裸で行われました。この再検査は無事完了し、直ちに新品の軍服「ラシャ製」の縦襟のもので、陸軍二等兵の階級章が付いており、初年兵の陸軍二等兵として軍人の第一歩、身に余る光栄で有りました。

入隊時は、第二十七連隊長は安永大佐で、第三大隊第十中隊に配属され、中隊長は伊豆原春雄中尉で、少尉候補生第二十二期でした。教官は五十嵐少尉で、陸士第五十五期、班長の北川軍曹は陸軍教導学校出で、これらの教官の下で初年兵としての教育が始まり、一期六カ月の教育は順調に推移しました。

昭和十七年十月一日、陸軍一等兵となり、即下士官候補者試験の受験を命ぜられ、中隊より四人中三人が合格しました。第三大隊の各中隊よりの下士官候補者は我が中隊に集結して、この集合教育の教官が自分の中隊の教官である五十嵐少尉でありました。特科及び通信隊を含めて四十人位と

この教育隊では演習場が広大で、長峰台の外にも沢山の山々があつて、これらの地形を利用しての適切な演習や訓練がなされました。また教育隊は、同期のみの教育であり、古年兵は一人もおらず、お互いに切磋琢磨、学科、訓練、体操、銃剣術等で各区隊取締や班取締と班長の訓練も一週間ごとに交替で実施されました。

六月頃と記憶していますが、たまたま気体有毒瓦斯の実験訓練が開始されました。瓦斯兵の操作を見学、全員が防毒マスクと防毒服を着用しているのですが、気流の関係で二区隊が全員瓦斯にやられて倒れました。涙、嘔吐、目を開くことも出来ず、夜ともなれば体温が四〇度以上になり、血を吐く始末で、七十二人中八人の重病者が出ました。自分もこの重病者の中に入り、応急手当としては吸入の手当のみの状況でした。そして即旭川陸軍病院に入院することとなったのですが、相変わらずの手当てで、約二週間の入院生活となり、大沢教育隊長（第五十四期・中尉）は部隊長に呼

ばれて活が入ったとか言われていました。とにかく死ぬ思いでした。この間、勉強も出来ず、遅れを取り戻すのために退院後は猛勉強をしました。

また以前、第一期の教育が終了直前に、軽機の実弾射撃訓練の際も、中耳炎が再発して一カ月ぐらい入院しました。

昭和十八年十月、当麻での訓練も六カ月、この間に当麻より愛別まで完全軍装での行軍がありました。小銃「九九式歩兵銃」を除く、背囊の中に正味三十キロの重量物、靴下の中に砂を入れる、水筒も雑嚢、円匙、天幕、外套やらで計量します。誤魔化しは許されません。往復三十キロの大変な行軍でありました。終わりの終末運動の指揮は自分がやりました。教育機関は一般兵の教育と異なり厳格そのもので、日曜日には写真屋、床屋が来る慰安会がありました。朝夕は必ず銃剣術は欠かすことがありませんでした。ここで教育も終わり、各中隊に帰りました。

引き続き札幌郊外にある恵庭幹部教育隊へ入校

いて、一 乾布摩擦、二 体操、三 銃剣術を行い、寒さの中でも汗が出て気分も上々でした。

同年十一月下旬、同校の卒業式があり、校長加納大佐より営庭において訓話があり、当日はお祝いとしてご馳走が出ました。ここで約六カ月、内地部隊との交流、戦友との交流、種々の教育期間の事柄、反省と語り、そして多くのことを学び、そして別れることとなりました。

そして北部第三部隊に帰属する各中隊の同期とも別れて帰隊しましたが、中隊長、隊付将校、下士官が迎えに営庭で待っていました。約二カ年余の教育を受けた事柄を申告し、階級は兵長でありましたが下士官勤務であり、下士官室にて先任と起居することになりました。週番下士官も二度体験しました。

昭和十九年二月一日付で陸軍伍長に任官し、中隊長に申告しました。そして春の新兵の入隊期で、初年兵の教育を待つ日々でした。下士官になって下士官室当番が交替で当たる。その間もすぐに満

し、最終の教育を受けました。そして昭和十八年十月一日付で陸軍伍長を命ぜられました。自分達候補者はこの学校の一期生でありました。

以前は内地の教導学校がありました。これは予備士官学校に昇格したとのこと聞いております。この校舎は実に優れています。まだ営庭が未完成で、囚人が懸命に工事に従事していました。

ここでの教育は総仕上げのことでもあり同期生も真剣でした。その内容は当麻時代と変化はなく、外のことには一切触れることなく、ただひたすら学ぶのみで、候補者も道出身及び内地出身、それに第四十二部隊と五百余人で序列を競うものでした。

当時アツツ島守備隊で山崎大佐以下二千五百余人の玉砕がありました。この葬式には我々候補者が儀仗衛兵として任務に就きました。恵庭の十一月〜二月は極めて寒く、風も強く肌に感じます。

教育訓練も厳格でした。起床と同時に営庭に整列、点呼、各区隊ごとに取締（班長同様）の命令にお

州第八百三部隊要員が当第三部隊に入隊しました。満州より我が中隊に軍曹三人が要員引き取りとして待機し、各班に二十人ずつ割り当てて軍人としての基礎教育として六日間、雪中運動を実施しました。この際、自分の故郷より同級生二人が入隊して来ました。沼館民雄、館田一二の両君で、自分の班に配属されました。筆記具、タオル等を差し入れ、教育が終わると二人を呼んで特別の指導と共に田舎の状況等を聞きました。教育が完了していよいよ満州へ出兵で、銃に白い包帯を巻き、隊より駅まで四キロぐらいを行進、ここで自分は旭川駅で監視衛兵司令を部隊命令として受領しました。ここで任官してから初めての衛兵司令を体験しました。これも学校で訓練を受けた賜物でもあります。

その後、新伍長の教育があるとのことでしたが、部隊長命令で三泊四日の報酬休暇を頂いて故郷へ帰ることになりました。二年余り経った帰郷ですので歓迎を受け、夜、昔の大きな蒲団の中でゆつ

くり寝ることのできた心持ちは最高のものでした。近所の方々も沢山こられ、ご馳走も珍しいお酒も充分嗜みました。

そして帰隊してから新下士官の教育が待っていました。三月頃だと思いますが、特別教育が開始されました。下士官となると一般の軽機や小銃の外に重機関銃などの科目があり、初日には重機関銃の分解、搬送よりスタートし、射撃の用法からさらに速射砲、大隊砲、連隊砲と四日間ずつ、これも基礎知識を得ることのみでなく、将来各隊への配属のためとか言われていました。これも初めての訓練でもあって随分厳格でありました。

思い出として練兵場への集合時間に遅れ、二日目に第七中隊の同期の二人が二分程度遅れました。教官は召集の遠藤中尉で双眼鏡で見ている。体罰として全員がビンタを受けました。速射砲の訓練日に練兵場より護国神社付近まで駆け足、自分は砲身係で重量感があり、若干二十一歳で若かったのでしょうか。全員が一緒に戻らないとまたやられるらしい。

この教育が終末頃、一息ついた頃、北部第三部隊が編成替えにより釧路へ行き、熊第九二〇五部隊となりました。昭和十九年七月頃より釧路天寧において、二年後輩の下士官候補者の第一期の教育を三角兵舎で行うこととなり、見上尚吾陸軍少尉（連隊旗手、陸士第五十七期）と共に助教を命ぜられました。

当時、教育訓練の余暇を見て炊事班に野犬が集まるとの知らせがありました。教官命令で野犬狩りを実施して二匹を捕獲、川辺で炊事班より野菜や味噌、鍋も借用して料理しました。自分は食わないが候補者は夢中で食べていました。食料不足の時でもあり空腹でもあったのでしょうか。また食料不足を補うため自分は候補者三人を引き連れて「トロッコ」車で鶴居村まで二キロぐらい、愛国国防婦人会の方々より芋や南瓜などを頂いて食べたことなど数々の思い出があります。

また第一年度の教育中、冬季の連隊演習があつ

たため教育はいったん中止となつて、各人は各連隊に戻り演習に参加しました。自分は第二分隊長として任務につきました。夜間演習中に腹痛を生じ、耐えられずに釧路の消防車のお世話になりました。当時は救急車もなく、釧路の野戦病院に入院、診断の結果、盲腸ということと翌日手術です。当時の軍医は麻酔もろくに使わず、痛かった思い出があります。約二週間の入院で、二日間の演習の途中でしたので残念至極でありました。省みますと下士官候補者の命令を受けて以来、重要な教育期間に四度目の入院をしたこととなります。

下士官候補者の命令受領後一等兵の一期教育中、軽機関銃の実弾射撃訓練中に、元来悪い中耳炎が再発、上等兵で瓦斯実験時など、合計四回の入院で、序列にも相当の影響があったことと思います。

原隊に戻ることも叶わず、再度下士官候補者の教育を担当しました。

昭和二十年二月一日付で陸軍軍曹に任ぜられました。ここで旭川の留守第七師団が設置され、第

一年度の下士官候補者の教育を二年度にわたり教育した後は、稔師団（第七十七師団）稔九二六〇部隊（歩兵第九十九連隊）に現役下士官補充の理由で配属となりました。目的は平時編成の第七十七師団が本土決戦準備のため野戦兵団としての編成替えて、動員完結は昭和十九年七月十七日と記憶しています。北海道を二分して熊師団・第七師団が道東地区、道西地区に対しては稔兵団・第七十七師団が対処することとなりました。

また稔第九二六〇部隊には、中隊より目黒曹長と自分二人が配属され、第六中隊に編入されました。ここで間もなく部隊命令が発令され、幹部候補生の教育助教を命ぜられました。各中隊より同期生四人とノモンハン帰還の望月軍曹一人、苦小牧中学校の一部を教舎として貸与されました。

昭和二十年四月八日、九州方面へ転用の命令が出ました。そして五月六日、第十六方面軍・睦集団戦闘序列に編入となり、稔兵団の防衛地区は新設の独立混成第一百一旅団が継承し、稔集団は苦小

牧付近より三十六本の臨時軍用列車によって長崎県諫早に向けて出発致しました。この時の情報では軍服が冬服であり、北支方面とのことも噂されてもいました。そして釧路より苫小牧までは、候補生への体験訓練のため衛兵勤務の実務を教えました。

ここで苫小牧滞在中の教育内容を記述しますと、釧路より苫小牧着の際、荷物の監視衛兵の教育実務を行いました。いよいよ本番になりますと、雨天となり、以降は野戦訓練、学科は主として国語工程、数学工程、重火器並びに各射撃に対応する教程で、ルート計算も行いました。一番困ったのは各々の候補生は大学、師範学校を卒業して適齢で入隊した者で、既に各隊で一応の初年兵教育を完了し、階級は伍長の「筋金入り」となっていたことです。また朝鮮の平壤出身のものも六人おり、彼等はなかなか優秀でした。

またここでは候補生の甲、乙の試験を実施しました。甲幹に合格した者は、自分がかって教育を冬服で大変暑い思いをしました。隊舎は小学校の一部、幹部は民家を借用しました。助教達も民家の一室、隊長は瀬川大尉（少尉候補生第二十三期）で、自分が初年兵の頃同じ中隊で先任の曹長でした。少尉候補生の時に実兵指揮の試験に我々第十中隊が参加しましたが、その時瀬川隊長は病気となり、その病名は不明でしたが、やむを得ず自分が代行して指揮を執りました。たまたま実施訓練が今日で終了することになっていましたので、B52グラマン機の空襲など激しかった時ですが、独断で訓練をしました。

訓練の内容は、我々が作った敵のM4戦車は、竹を切り擬装した大きさが本物と変わりない模型で、空から見ると戦車として判断できるものでした。田圃の畦道において「キユウソウ」爆雷の投入演習である。その時の自分の判断が甘かったのか、候補生の「助教殿、敵機です」との声に直ちに「伏せ」の号令を下しましたが、グラマン機の機銃掃射で、瞬く間に模型戦車も焼けました。こ

受けた恵庭の校舎は予備士官学校として昇格しており、ここに送りました。残る乙幹は三十数人と特科隊「乙幹」計四十人ぐらいを引き連れて鹿児島へ着きました。

第十六方面軍は第四十一「陽」師団、第七十七稔第九二六〇部隊で、他の兵団は沿岸防衛に張り付け、我が稔第九二六〇部隊は、その素質練度は他の師団と比較して優秀であり、南九州防衛の中心兵団として期待されていました。

稔師団は機動師団であり、海岸正面の築城と訓練に当たりました。乙種幹部候補生は階級は伍長を与えられていました。鹿児島串木野町での教育時に空襲の情報が入りました。我々候補生隊は大隊の配下での行動であり、しかも教育隊として独立しており、その夜は隣の部落である市木村へ夜間行軍で移動しました。

敵機の襲来もますます激化し、移動は山奥の溝辺村へ移動しての教育でした。ここでようやく夏服が届いた状態でした。それまでは二週間以上も

の時は小銃班のみで二十人ぐらいでした。集合を命ずると全員無事でした。田圃の土が顔に掛かり暑さを感じました。隊舎に戻り、瀬川隊長に事故の報告をしました。たつぷりと叱られました。

その日は空襲が多い情報が入っていて学科を致せとの命令もあった。命令に反したことでした。

約三カ月の教育で、八月十五日には終戦の知らせを生徒が伝えにきました。ちょうど自分は民家の風呂に入っていました。終戦を機会に乙種幹部候補生の教育も解散することとなり、各中隊へ全員帰隊しました。自分も中隊へ帰隊するが、命令受領が私の任務でした。

間もなく独立憲兵隊へ配属の命令が下りました。隊舎は鹿児島商船学校二階の部屋で、その間台風があつて三階建ての校舎が倒壊しました。当地は海抜零という土地であり、海水が川に逆流して校庭にあつた軍用トラックも水没して動かない状態でした。

憲兵軍曹として伍長靴、拳銃、軍刀、憲兵腕章

をして二日間伍長より憲兵教育を受けました。特に巡察区の指示もあり、海岸地区が主でした。連日の勤務も鹿児島は暑く、単独勤務で、列車は無賃、終わっての報告は文書で行うなどでした。海は敵の攻撃により船が海中に横になっていて無惨な姿を呈していました。

以上、軍隊の歴史も一応の敗戦によって終局を見ることとなりました。周辺の進駐軍軍政下にあつての治安維持も警備も終了となりました。稔兵団のうち三個歩兵連隊の軍旗は始良郡始良町の山中で昭和二十年十月十六日奉焼されたと聞いています。師団主力の帰還は十月初旬より逐次臨時列車にて行われ、我々憲兵隊のみは船での帰還でした。私は、十月二十日、帰郷列車に乗り、瀬戸内海では漁船に分乗し、また列車と乗り継いで函館七重浜に到着しましたが、正確な日時は記憶にありません。異常な混雑ぶりであつたと思います。

回顧すると、三年八カ月余りの軍隊は、軍事教育に携わつて来たこととなります。戦場に送つた

兵隊の数は少ないが、亡き英霊を偲ぶよすがとも、また自分が紙碑ともなつていきたいと思つていきます。そして共に、子孫に伝えられるように念願してやみません。

昭和二十年九月末現在での復員者の資料によると、第七十七師団の復員者数は一万五千七百人となつたとか、聞いております。

戦前の旭川市は、第七師団と共に発展し、軍都の名は市民の誇りでもありました。現在の旭川駅から平和通り、買物公園、旭橋、護国神社に至る道筋は「師団通り」と呼ばれ、商店街はスズラン灯で飾り立てられていました。日曜日は将兵の買物客で溢れ、出征や凱旋の送迎では市民の旗や提灯行列で埋め尽くされました。自分の旭川時代の師団長は鯉登行一中将閣下でした。中将は「私は力なく死なせてしまった多くの部下やご遺族の方に何も出来ない。仏壇に毎日手を合わせるしか」と言い絶句されたとか、その二年後八十一歳で逝去されました。

現在、入隊時の戦友会は「オサラッペ会」と云い、月例会や忘年会、新年会などを開催して、既に二十三年の歴史がありました。

陸軍船舶兵として

神奈川県 今井 富 清

私は愛知県幡豆郡吉野町富好三六番地の今井家の長男として生れ、兄弟は無く一人子でした。家は廻船問屋を営み、常時二人の雇人がいて、主として三河湾で荷物の運送業をしていました。吉良尋常高等小学校を卒業すると早速家業の仕事を手伝い、父と私と雇人二人の四人で、一二〇トン級の貨物船二隻で運搬業をしていました。主に瓦や煉瓦等を積んで運んでいました。

昭和十（一九三五）年七月、本籍地の愛知県幡豆郡吉田町（現在吉良町）の小学校講堂にて徴兵検査を受け第一乙種合格となりました。そして昭和十二年七月二十七日支那事変が勃発、世相は慌ただしくなり、あちらこちらから応召兵の出征する姿が見えるようになりました。私も覚悟はしておりましたところ、同年十月十三日赤紙の召集令